

## <特集論文> 『今昔物語集』に登場する犬

著者	永藤 美緒
雑誌名	日本文学誌要
巻	57
ページ	42-53
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019991">http://hdl.handle.net/10114/00019991</a>

## 『今昔物語集』に登場する犬

永藤 美緒

### 一 神としての犬

『記紀』神話の時代から、神のために機をかまえ、神御衣を織ることは巫女の重要な仕事だった。このことは、三輪山伝承のおだまきの糸を辿って、活玉いくたま依姫よりひめのもとに夜な夜な通う夫が、大物主神おおもものぬしのかみだったことを知るといふモチーフにもよく現れている。箸墓伝承で、倭迹やまとこと々日百襲ももぢひめ姫が箸でホトについて死ぬというモチーフは、須佐之男命が天照大神のもとで狼藉をはたらいた際に、驚いた機織女が梭でホトをついて死ぬ、というモチーフの変形である。このように『記紀』神話においては、巫女たちは、大物主神

という蛇神のために機を織っている。だが、古代と中世の過渡期に成立した『今昔物語集』の中では、蛇は神から怪物へと零落し、巫女的な女性が寄り添う神の化身も、もはや蛇ではない。

まず、『今昔物語集』巻二十六第十一話「参河国、始犬頭糸語」の概要を挙げる。

三河国の郡司は、二人の妻を持っていて、それぞれの妻に蚕を飼わせていた。ところがどうしたものか、先の妻の蚕は全て死んでしまった。夫はこの妻を顧みなくなり、使用人も次々に去り、先の妻の家は貧しくなった。先の妻は、桑の葉に一匹だけ蚕がいるのを見つけ、これを大切に飼いはじめる。ところがこれも、飼っていた白い犬に喰われてしまった。

蚕一匹飼えないのも、なにかの因縁だろうと嘆いて  
いると、犬がくしゃみを始め、鼻の二つの穴から糸  
が出てきた。これを巻き取ると、たくさんの上質の  
絹糸がとれた。糸を巻き取り終えると、犬は死んで  
しまった。先の妻は犬を神仏の化身だと思い、桑の  
木の下に埋める。これを知った夫は、神仏の信仰厚  
い妻を捨てた自分を悔いて、今の妻のもとには行か  
なくなった。今の妻の蚕から取れた糸は、粗悪なも  
のだった。犬を埋めた桑の木には、上質の繭玉がな  
った。それ以来、この国からは「犬頭糸」が調とし  
て納められるようになった。

この説話は、オシラサマの伝承を想起させるとい  
う指摘もされている。娘が馬と夫婦になったことを  
怒った父は、馬を殺して桑の木に吊るした。娘が馬  
の首にすがって泣くと、父はこのことにも腹を立て、  
馬の首を切り落とした。娘は馬の首に乗って天に昇  
り、これがオシラサマという神になった。<sup>②</sup>この伝承  
には村によって少しずつ違いがある。木に吊るされ  
たのが馬の皮で、娘はこれに包まれて天に昇ったと  
する話や、悲しむ娘が馬の皮を帆に張って小舟を造  
り、旅立ったとする話もある。<sup>③</sup>オシラサマは養蚕の  
神で、この伝承の結末では、娘が馬の亡骸と共に去

った後、蚕がもたらされる。女と彼女が寄り添う動  
物が登場すること、その動物が死ぬことによって絹  
糸がもたらされるということ。この二つの点で、『今  
昔』の巻二十六第十一話とオシラサマ伝承は共通す  
る。

オシラサマは家に祀られる神であり、養蚕だけで  
はなく、女の病を治す神や子供を守る神としても崇  
められていた。<sup>④</sup>また、『今昔』巻二十六第十一話から、  
郡司の職にある男は地方行政で活躍し、女は経営の  
主導権を握っていることがわかるという指摘  
もある。<sup>⑤</sup>よってこの説話に登場する白い犬は、家の  
女の仕事としての養蚕の神であるといえる。『今昔物  
語集』の中では、巻十九第四十四話「達智門棄子狗、  
蜜来令飲乳語」に登場する白い犬も、オシラサマの  
ような神と考えることができる。この犬は、夜な夜  
な捨て子に自分の乳を飲ませ、「どうしてあの赤ん坊  
は死なないのだろう」と不思議がる男に見つかる<sup>⑥</sup>と、  
子供もろともにどこかへ消え去る。「この白犬は神仏  
の化身で、子供はどこかで無事育てられるだろう」  
という、男（語り手）の感想で説話は締めくくられ  
る。子供を守る神という点では、これもオシラサマ  
と共通する。

ここで注目することは、機織りや糸紡ぎという共通のモチーフを持つているにもかかわらず、『記紀』神話に登場する巫女的な女性が仕えていた神が、三輪山という人々の共同体の外にある異界の神であったことに對し、『今昔』の白犬はオシラサマのような家の神として描かれていることである。大物主神と白犬は、山と家、自然と文化という反対の属性を持つ神である。『記紀』神話では畏怖の対象であった山の神・蛇が、『今昔』の説話では怪物へとおとしめられ、代わって文化的なレヴェルで神として人間を守る犬の活躍が見られるようになる。このような蛇から犬への変化、あるいは蛇に打ち勝った犬を象徴的に描いている説話が卷二十九第三十二話「陸奥国狗山狗、昨殺大蛇語」である。

多くの犬を飼い、それを連れて山の奥深くまで入っては、犬に猪や鹿をかみ殺させて狩りをする男が、いつものように山で夜を明かそうとしていた。男を呑もうと狙っていた大蛇を、長年飼っていたとくに賢い犬がかみ殺し、男は危うい命を取り留めた。

自分の主人を守るため、山の主のような大蛇をかみ殺した忠犬の話だが、山の邪神と男の守り神の戦いの話として読むこともできる。この犬は、男の家

を守る神であり、男自身を守る神でもある。山という異界の中でも、男が家にいる時と同じように安全に過ごせるように、常に男の影身につき添う。

このような説話からは、神としての犬は、自然から切り離され、文化の中に取り込まれた家の神であり、大物主神とは対照的な神であるかのように見える。だがその一方で『今昔物語集』には、大物主神と同じような、人間の手に負えない自然の神として描かれる犬も登場する。卷三十一第十五話「北山狗、人為妻語」がその例として挙げられる。北山で道に迷った男は、小さな庵を見つけ、そこに住む美しい女に一夜の宿を頼む。この女は恐ろしい白犬を夫としていたが、男を「自分の兄」だと夫に言って、無事朝を迎えさせる。男が庵を出る際に、なにか入り用のものがある時には、かなえさせるのでここに来るように、だが決してこの庵のことは人に言うなと、女は言う。だが男はこれを破って人々に話す。話を聞いた血氣盛んな若者たちは犬を殺し、女を連れてこようと出掛けてゆくが、犬は女を連れて山奥に入り、姿を消す。一方戒めを破った男は病死する。

この説話の中にも、女が夫である白犬のそばで糸を紡ぐ場面がある。白犬はおそらく、疫病神の化身

だろう。『日本書紀』で、国に疫病が流行った時に、大物主神が倭迹々日百襲姫に憑いて自分を祀るようにと告げたように、この白犬も巫女として仕える妻がそばにいたので、男に無事に夜を過ごすことを許した。だが、男が一たび戒めを破った際には、容赦なく病気で死に至らしめる。疫病神の化身として犬が登場するという点では、卷二十六第二十話「東小女、与狗咋合互死語」も卷三十一第十五話と同類の説話である。

ある女童は、隣家の白い犬と会うと、なぜかいつも喧嘩をしていた。ある時、この女童が流行り病にかかり、重くなったので隔離された。遠くに隔離されたにもかかわらず、犬は二日後にはやって来て、女童と互いに歯を食い合わせて共に死んでしまった。人々は女童と犬とはこの世限りの敵ではなかったのだろうと噂しあった。

この説話が収められている卷二十六は「宿報部」で、死ぬ時まで争った女童と犬との間になにかの因縁があったことを述べている。この因縁は、人々が噂しあったような前世からの敵同士だったことを指しているのかもしれない。だが、そればかりではなく、この白犬と女童の間にも、疫病神とそれに仕え

る巫女の関係を読み取ることができる。今まで挙げてきた『今昔』の説話の犬にしても、『記紀』神話を見ても、神の化身の動物の色は白である。この説話に登場する犬も白い犬である。また、最後に犬と女童が互いに食い合って死ぬ場面も、婚姻を暗示していると考えられる。疫病が流行った時に、倭迹々日百襲姫は大物主神を祀り、後にはその神の妻となった。女童も疫病神の化身である白犬の妻となった。説話には、流行り病がどうなったのかは記されていない。だが、女童と白犬との婚姻によって病が鎮まったことは想像される。

以上のことから、『今昔物語集』の説話には神の化身として犬が登場していることがわかる。このような犬たちとは、自然から切り離され、文化的なレヴェルに取り込まれた家の神あるいは守り神として登場するものと、人間の共同体の外にある自然の中に住み、人々の手に負えない病を操る疫病神として登場するものという、正反対の二つのタイプに分類することができる。よって、『今昔』の説話の世界では、犬は自然にも文化にも属している存在だといえるが、これについての詳しい考察は、後の章にまわすことにする。

## 二 卑しまれる犬

前章では、神の化身として登場する犬について述べてきた。だがその一方で、現代でも「犬」という言葉に蔑みが込められることがある。「犬畜生」という罵倒の言葉や、「負け犬」という表現などがその例である。この章では、前章で取り上げてきた犬たちとは対照的に、『今昔』の説話の中で卑しまれた存在として描かれた犬について述べる。

『今昔物語集』の説話に登場する犬で、蔑まれたものは、前世の悪業のために畜生道に落ちた人の姿である。卷第十四第十六話「元興寺蓮尊、持法花経知前世報語」と同卷第二十一話「比睿山横川永慶聖人、誦法花経知前世語」は、いずれも前世は犬だった僧の話である。僧は犬の身だった時に、持経者の房の近くにいたために、法華経の読誦を聞いたことの功德で、人に生まれ変わり、僧となって法華経を読誦する身となったということを、夢のお告げで知る。第十六話の僧蓮尊は、普賢品だけは暗誦できなかったが、それは犬だった時に普賢品だけは聞けなかったせいだという因果を知り、その後は暗誦できるよ

うになり、ますます読誦を怠らなくなったという締めくくり方をしている。だが、二十一話の永慶は前世の宿業を恥じて、法華経を読むことで懺悔をする。明らかに、犬を畜生として卑しんだ描き方である。

さらに卷十九第三話「内記慶滋ノ保胤出家語」と卷二十第十六話「豊前国膳広国、行冥途帰来語」に登場する犬は、いずれも前世人だった時に傲慢で貪欲だった罪業で、汚物を喰う。卷十九第三話では、厠で排泄物を喰おうと様子を伺う犬に、僧となった保胤が前世の報いだということを説き、その犬は自分の親の生まれ変わった姿だからと、器に飯を盛り、菜を添えてすすめるが、あとから他の犬たちもやって来て、争ってがつがつと喰い合う。はじめは保胤は犬を諭し、別に食事を用意するので争うなと言うが、犬が聞く耳を持つはずもないので、しまいには保胤も争う犬たちを見捨てる。ここからは、食べることに貪欲で、仲間と譲り合うこともせず、排泄物までも喰うという、意地汚い獣としての犬の姿を伺うことができる。このような犬は、『餓鬼草紙』に描かれた餓鬼たちの姿を連想させる。同便餓鬼や食糞餓鬼は、前世貪欲で布施を行わず、僧に不浄の食物を与えた因縁で餓鬼道に落ちた者である。同便餓鬼

たちは、街角の排便場で人々が用を足しているところに群がっているところを描かれている。食糞餓鬼は、糞尿の池に入つて手で掬いながら貪る様子が描かれている。地獄・餓鬼・畜生の三惡道の中で、地獄の次に罪深い者が落ちるのは餓鬼道である。餓鬼に最も近い畜生が犬で、畜生道に落ちた者の中でもとくに罪深い者の生まれ変わった姿と考えることもできる。

さらに不淨なものを喰う犬、貪る犬として挙げられるのは、死体を喰い裂く犬である。先に挙げた『餓鬼草紙』には、疾行餓鬼という死体に集まる餓鬼たちとともに、死体を喰いあさる犬の姿が描かれている。死人が九つの相を表して朽ち果てる様を描いた『九相詩繪卷』でも、犬や鳥に喰い荒らされる死体が生々しく描かれている。『今昔』の説話の中では、卷十五第二十六話「幡磨国賀古駅教信、往生語」がその例である。教信は、妻帯という僧にとっての破戒を犯しながらも、念仏を怠らなかつたので往生できたという話である。往生を遂げた教信の死体は、犬と鳥に争つて喰い荒らされる。また、実際に起きた事件を記した卷二十九第八話「下野守為元家入強盜語」もこの例である。強盜の人質にされた若い上臈

女房が、馬に乗せられて町を連れ回された挙げ句、衣を取られて捨て去られる。女房はさまよううちに水に落ち、民家の戸を叩いても「物騒なので」と戸を開ける者もなく、寒さと恐怖に震えながら死に、犬に喰われる。朝には彼女の長く美しい黒髪と鮮やかな紅の袴が、血まみれの頭とともに発見される。前章で挙げた捨て子を自分の乳で育てる白犬を描いた卷十九第四十四話でも、捨て子を見つけた男が考えたのは、子供が飢え死にすることよりも、犬に喰われてしまうことである。このような説話からは、犬が死体や捨て子などを喰うことが実際にあったことが伺える。

しかし、このような貪る犬は、ただ卑しい畜生としてだけ描かれているのではない。死体を喰う犬を描く説話の中でも、卷十三第九話「理満持経者、顯經驗語」は異質である。法華經の誦誦に余念のなかつた聖人理満は、自分の死を夢に見る。風葬にされた自分の死体がたくさんの犬たちに喰われるのを見て、なにゆえかと思っていると、天からの声が、犬たちは昔天竺の祇園精舎で仏の説法を聞いた人達で、理満を結縁させるために犬となつてきたと告げる。

この説話における犬たちは、死体を食っていないが、畜生道に落ちて不浄のものを喰うことを余儀なくされた犬たちとは明らかに異なる。聖人を結縁させる仏の弟子たちの化身である。このことから、死体を食う犬は単に卑しい畜生として捉えられていたのではないことがわかる。先に述べた『餓鬼草紙』や『九相詩絵巻』に描かれた死体を喰う犬は、黒田日出男にも指摘されている<sup>8</sup>。黒田は他にも様々な絵に登場する、死体を喰う犬や人の嘔吐物を喰う犬や、『今昔』巻十五第二十六話の教信の死体を喰った犬や、巻二十九第八話の女房の死体を喰った犬なども紹介した上で、犬は疫病が蔓延した時の大量の死体を食べ、日常においても人間の残飯や汚物を食べる「清掃」役であると述べている。犬は不浄な物を食べるべくし、人間の生活環境を清める役割の担い手だった。理満を結縁させるために、仏の弟子たちが犬となって彼の死体を喰ったのも、理満を清めたのだと考えられる。

ここで思い起こすのが、「犬神人<sup>いぬじん</sup>」と呼ばれた中世の非人である。犬神人については、黒田日出男が洛中洛外図や、『一遍聖絵』などに、白い頭巾や覆面をかぶり、柿渋色の着物を着た姿で描かれていること

を指摘している<sup>9</sup>。また、網野善彦<sup>10</sup>によれば、犬神人は祇園をはじめ、様々な寺社に属しており、かなりの範囲で諸国に分布し「畿内近国犬神人」と言われていたという。彼らのような非人は、十二世紀には史料に現れるようになり、もともとは葬送に携わったり、馬や牛の死体を処理して皮革の加工を行ったり、死の穢れを清めたり、罪人の家を壊し、人を追放する、あるいは処刑するといった罪の穢れを清めることを仕事とした。当時は犬神人は天皇や神仏に直属し、清めという平民にはできない特別な能力を持った聖なる存在として、他の者たちから区別されていた。そして南北朝の動乱を境に、「穢多」という言葉も使われだし、彼らは賤視されるようになる。網野善彦は、このような犬神人の賤民化・低落は、天皇や神仏の権威の低下を背景にしていると指摘している。その一方で、犬神人の称号について、「犬」という言葉が付されていることは、差別の萌芽・兆候の現れとみることもできるとも述べている。彼らは、穢れを清めるといふ特別な力を持つ聖なる存在であるゆえに、人々から怖がられた。彼らの賤民化の背景には天皇や神仏の権威の低下ばかりでなく、このような人々の畏怖もあったと考えられる。彼らは聖



なるゆえに賤なる存在だったのである。<sup>(11)</sup>

また、網野善彦は、犬神人の「犬」という言葉について述べる上で、犬が境界的な動物であることもふれている。死体や汚物を食べる犬たちが、『今昔』の説話の中では畜生道に落ちた罪人の姿として描かれていながら、時には聖人が成仏するために結縁させる仏の弟子として描かれる。汚物や死体を喰う犬の姿が、人々の目に時には卑しく映り、時には黒田日出男が述べているように、穢れを清めているように見えたのだろう。つまり、人々は犬を、聖と賤の両義性を持つ動物として捉えていた。それは犬神人に付された「犬」という言葉にも現れている。

この章では、死体や汚物を食べる犬について述べてきた。このような犬たちは、『今昔物語集』の説話の多くでは、卑しまれた存在として描かれており、聖人理満を結縁させた犬たちは、例外的な死体を喰う犬のように見える。だが、犬は両義的な動物なので、畜生道に落ちて汚物を喰う犬も、結縁のために聖人の死体を喰う犬も、実は同じ犬だと考えられる。

### 三 境界的な犬

第一章では神としての犬について考察し、自然の荒ぶる神として登場する犬と、文化的な家の神として登場する犬がいることについて述べた。第二章では、死体や汚物を喰うものとして卑しまれた犬について考察し、犬の持つ聖なる面と賤なる面について述べた。このように見ると、犬は自然の神でありながら文化の神であり、聖なる動物でありながら賤なる動物であるという両義的な存在であることがわかる。網野善彦が犬が境界的な動物だと指摘していることは先にも述べたが、この章では自然と文化、聖と賤といった両義性をふまえ、境界的な存在としての犬について考察する。

犬が境界的な存在として登場する例は、『記紀』神話や『風土記』にも見られる。<sup>やまとたけるのみこと</sup>『日本書紀』景行天皇四十年是歳では、日本武尊は信濃の国で白い鹿に化けた山の神をニンニクを投げつけて殺した際に、道に迷う。その時に、どこからともなく現れた白い犬が日本武尊を美濃まで導く。『播磨国風土記』では、景行天皇が賀古の郡で印南の別嬢に求婚するが、印

南の別嬪は南毘都麻嶋に逃げる。その時に、別嬪が飼っている白い犬が海に向かって吠え、天皇は別嬪の居所を知る。さらに『近江国風土記』の伊香小江の記述はいわゆる天人女房譚（羽衣伝説）だが、伊香刀美<sup>いかとみ</sup>という男は天女を見初めた際に白い犬を遣わして、羽衣を盗ませる。

『日本書紀』の例では、犬が山の中という異界で道に迷った日本武尊を導くという、案内者の役割を果たしている。『播磨国風土記』の例も、海の向こうにいる別嬪のことを知らせた、という点では異界との仲立ちをしたと読むことができる。『近江国風土記』の例では、天女という異界に住む者を地上に留める役割を果たしていることがわかる。『近江国風土記』に限らず、天人女房譚では犬が重要な役割を果たしていることが多い。關敬吾著『日本昔話集成』<sup>12</sup>を見ると、広島県比婆郡駒信村、熊本県飽託郡、同県本村、琉球大島郡焼内村にそれぞれ伝承している天人女房譚が、その例に挙げられることがわかる。天人と結婚した男が妻を慕って天に昇る際に、百足もしくは千足の草履を作って土に埋めると、天に届くような木や竹が延びるが、一足たりないために、あと一步のところまで天に着くことができない。その時に、連れ

てきていた飼い犬が天に上がり、尻尾に捕まって這い上がることに成功する。これらの民話の中では、犬が地上と天との仲介者になっている。

『今昔物語集』の説話にも、異界との仲介者や案内者として犬が登場する。まず挙げられるのが巻第十一話「慈覚大師、巨宋<sup>13</sup>、伝顯密法帰来語」である。慈覚大師（円仁）は顯密の法を習うために唐に渡るが、時の皇帝恵正天子は仏法を滅ぼす宣旨を出す。慈覚大師は皇帝の使いに還俗させられそうになるが、自ら起こした靈驗のため使いが恐れたことと、異国の僧だったことのために逃れる。そして城を見つけ、かくまってもらおうと身を寄せるが、ここが瀨瀨城という、捕らえた人を薬でものを言えなくして、太らせて、高い所に吊るして血を抜く所だった。慈覚大師が薬師如来に助けを求めて祈ると、大きな犬が現れて、大師の衣の袖を捕らえて引き、外へと導き出すと、どこへともなく姿を消す。この説話では、犬が薬師如来の使いとして現れて、異界の案内者の役割を果たしている。

次に挙げられるのは同巻第二十五話「弘法大師、始建高野山語」である。この説話の前半は『金剛峰寺建立修行縁起』で、弘法大師は、唐で投げた三鈷

の落ちた所を金剛峰寺を建てる聖地にしようとする。弘法大師が三鉢を求めて大和国宇智の郡に着くと、大小二匹の犬を連れた狩人に会う。狩人は南山の犬飼と名乗り、三鉢の落ちた所を知っていると云って犬を放つ。犬たちは走っているうちに消えてしまうが、これを案内者として弘法大師は聖地を知ることになる。熊野縁起も直接犬が案内者になったのではないが、猪を追った犬飼の千与定が、熊野三所権現を見つけたという内容なので、これと同類の縁起譚と考えられる。犬は聖地を見つける上での重要な案内者である。

黒田日出男は卷十一第十一話・二十五話のほかに、山の中で女を妻としていた白い犬を描いた卷三十一第十五話を挙げ、犬を「神」ないし神の使いとして、他界との間を往き来する境界的な動物として認識されていたと思われる」と述べている。卷三十一第十五話は、第一章で私も取り上げたが、この説話は異界訪問譚と見ることができるので、犬と異界との深い関わりを述べる例として、ここでも挙げることもできる。

さらにもう一つ、卷二十八第二十九話「中納言紀長谷雄家頭狗語」も境界的な動物としての犬を述べ

た説話として挙げられる。犬が常にやって来ては筑垣に放尿していくので、陰陽師を呼んで占いをさせるところから始まる説話である。実際中世日本において、犬の行動がもとで陰陽師が招かれ、火事や病の予兆とわかり、物忌みや祈禱が行われることがあった。<sup>16</sup>これは犬が異界との仲介をする動物として意識されていたためである。

このような異界とこの世の仲立ちをする境界的な動物と見なされていたので、犬が説話において神として描かれる時、第一章で挙げたように文化的レヴェルに取り込まれた家の神的存在と、人間には制御できない自然をつかさどる荒ぶる神的存在と、二つのタイプに別かれるのだろう。また、第二章では犬の聖と賤の両義性について述べてきた。その背景には、犬の汚物を喰う行為が、時には穢れに触れているものと捉えられ、時には穢れを清めるものと見なされていたこともある。だが、そればかりではなく、犬が境界的な存在だったからこそ、時には神の化身として畏怖され、時には共同体の外部から得体の知れないものを持ち込みかねないと怖がられたということも、十分に考えられることである。

それでは、なぜ犬が境界的な動物と見なされていた

たのだろうか。一つには、人間にとって身近な動物としての犬の生態と関わっているのではないだろうか。犬は古くから、飼い馴らされてきた動物である。大和朝廷の制度にも、犬養部があり、番犬や軍用犬が飼育されていた。<sup>①</sup>『播磨国風土記』で天皇に別嬪の居所を告げた白い犬は、別嬪の飼いだである。『近江国風土記』で伊香刀美が遣わして羽衣を盗ませた犬も、おそらく彼の飼いだだろう。さらに前出の『日本昔話集成』に挙げられた天人女房譚で、犬の助けで天に昇る男の中には、犬飼つまり犬を使って狩りをする者がいる。『今昔物語集』にも犬飼が登場する説話はある。先に挙げた、弘法大師に聖地を教えた二匹の犬を連れた南山の犬飼が登場する巻十一第二十五話や、第一章で挙げた巻二十九第三十二話の、犬が主人を守って蛇をかみ殺した話もその例である。また、巻二十六第七話「美作国神、依狎師謀止生贅語」では、犬飼は「犬山」という言葉で記されているが、この犬山を生業とする男が、猿神を退治して生贅にされそうになった娘を救う。この時、男は猿を見たらかみ殺すように、犬たちを訓練する。犬たちの活躍もあって男は猿神退治に成功する。このような説話からもわかるように、当時犬は狩猟に

よく用いられ、その点では人間の生活の文化レベルへと完全に取り込まれた動物であった。

だがその一方で、都市に野犬が横行していたという事実は黒田日出男も指摘している。<sup>②</sup>『今昔物語集』の説話にも、野犬が死体を喰う場面は多く、その例は第二章で挙げてきたので、あえてここでは繰り返さないが、一つだけ例に挙げる。巻二十九第八話で、強盗の人質にされた末に凍え死んだ若い女房の死体が、犬たちに食われた後の描写は「糸長キ髪ト赤キ頭ト紅ノ袴ト、切、ニテゾ凍ノ中ニ有ケル」と、かなり生々しい。この説話が、実話に基づいているせいでもあるだろう。同時に、当時の人々の野犬に対する恐れの間接的な証拠と読むこともできる。野犬の横行は、都市における人々の手に負えない自然の姿である。

つまり、飼い馴らされて人々の生活の場にいる文化的な犬と、人々が恐れる自然の属性を備えたままの犬とがいたことになる。いずれの犬も、人々の身近なところにいる。すると人々が、飼いだと野犬は違うものだと思いつつも、犬という動物そのものの中に忠実さと凶暴性の両方を見出していたことは考えられる。犬は常に人々の日常生活の場と、自然という異界の狭間にいる動物で、人間の忠実な手下で

ありながら、時には自然の報復とばかりに牙をむく恐るべき存在として、意識されてきたのだろう。

本論では第一章で神としての犬について、第二章では汚物を喰うものとして卑しめられた犬について考察してきた。いずれも家の守り神と荒ぶる神、穢れと清めあるいは聖と賤という両義性が浮き彫りにされた。このような両義性は、犬が人々の生活空間においても境界的な場にいる動物だったゆえに生じたものと考えられる。

#### 注

- (1) 阪倉篤義・本田義憲・川端善明校注『新潮日本古典集成・今昔物語集・二』
- (2) 柳田国男『遠野物語 付・遠野物語拾遺』角川文庫
- (3)(4) 「遠野物語拾遺」前出『遠野物語』所収
- (5) 脇田晴子「中世における性別役割分担と女性観」『日本女性史・第二巻・中世・女性史総合研究会編・』東京大学出版会・所収
- (6)(7) 小松茂美編集・解説『日本の絵巻7・餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻』中央公論社
- (8) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社
- (9) 黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』東京大学出版会
- (10) 網野善彦『中世日本に何が起きたか』日本エディタースクール出版部『中世の非人と遊女』明石書店
- (11) その他にも犬神人については京都部落史研究所編の『中世の民衆と芸能』阿吽社で、河田光夫が『親鸞絵伝』や『法然絵伝』に描かれた犬神人を例に述べ、彼らが自らの職能の重要性を主張して、したたかに生きる被差別民だったことにふれている。

- (12) 關敬吾『日本昔話集成』角川書店
- (13) 題では「宋」となっているが、史実としては「唐」が正しい。(池上洵一校注・『新古典文学大系・今昔物語集三』の脚注より)
- (14) 五来重「熊野三山」『国文学解釈と鑑賞・第四十七巻三号・寺社縁起の世界』至文堂
- (15) 前出『姿としぐさの中世文学』
- (16) 笹本正治『中世の災害予兆』吉川弘文館
- (17) 金子浩昌・小西正泰・佐々木清光・千葉徳爾『日本史のなかの動物辞典』歴史書懇話会
- (18) 前出『姿としぐさの中世史』

(ながふじ みお・大学院修士一年)